

論文 Article

大学生における居場所感と大学生活不安に関する研究

—学生相談室の利用の有無に注目して—

原稿受付 2011年4月1日

ものづくり大学紀要 第2号(2011) 60~65

条原民子, 社浦竜太

ものづくり大学 学生相談室 カウンセラー

A study of “sense of *Ibashi*” and college life anxiety in college students

Tamiko KUMEHARA, Ryuta SHAURA

Counselor of Counseling room, Institute of Technologists

Abstract In this study, we examined the effect of “sense of *Ibashi*” on college life. We separated college students into three groups by score of “sense of *Ibashi*” and found significant difference between these groups in level of anxiety on campus. The result suggests that students who have “sense of *Ibashi*” feel less anxiety than these who don’t have.

Key Words : sense of *Ibashi*, college life anxiety, counseling room.

1. 問題

1.1 居場所に関する研究

近年、「居場所」研究が様々な形で見受けられるようになってきている。石本(2009)は、心理学および関連分野における居場所研究を概観した結果、5つのカテゴリーに大別している¹⁾。1つ目は、「居場所の内容についての考察」、2つ目は「居場所の分類についての考察」、3つ目は「居場所から捉える臨床事例」、4つ目は「自由記述を用いた居場所研究」、5つ目は「尺度を用いた居場所研究」である。このように、様々な形で居場所研究がなされるようになってきたが、居場所感と精神的健康について言及している研究は散見される程度である(杉本・庄司, 2006)²⁾。

1.2 居場所感と精神的健康に関する研究

杉本・庄司(2006)が指摘するように、居場所感と精神的健康に関する研究は散見される程度で

ある²⁾。たとえば、杉本(2010)は、中学生を対象に、「居場所環境」と精神的健康との関連を検討している。居場所環境については、「自分ひとりの居場所」・「家族のいる居場所」・「友だちのいる居場所」の3種を「居場所」の「有り・無し」の組み合わせにより8つに分類している。精神的健康については、GHQ28の「身体症状」・「不安と不眠」・「社会的活動障害」・「うつ傾向」の4因子を考慮しながら、対象である中学生に即した尺度を作成している。その結果、中学生の居場所環境においては、「家族のいる場所」・「友達のいる居場所」と精神的健康との関連を示していた³⁾。

また杉本・庄司(2006)は、中学生からはじまる青年期に焦点を当てて精神的健康と「居場所」との関連および影響を、「現在と過去の居場所環境の比較」という観点から検討している²⁾。

以上のように、散見される居場所感と精神的健康に関する研究であるが、前者の研究の調査対象

は中学生であり、大学生を対象とした研究ではない。また後者の研究にしても、現在および過去（大学生である現在の居場所と中学生時における過去の居場所）という時間軸を考慮した検討である。無論、時間軸といった次元は臨床的な観点において有用な知見を与えるものと思われるが、大学生を対象とした居場所論を展開する場合、「大学」というコミュニティに注目することは、大学における学生相談臨床に重要な示唆をもたらすものと思われる。

1.3 大学における学生相談室の居場所機能に関する研究

大学というコミュニティの中で、学生相談室の居場所機能に注目した研究がいくつか見受けられる。屋宮（2008）は、長期不適応状態で、大学に居場所がない学生達を対象に、学生相談室におけるサポート・グループを展開させ、そのプロセスについての事例検討を行っている⁴⁾。その結果、サポート・グループが参加したメンバーに及ぼした効果として、以下のいくつかの機能について屋宮（2008）は言及している⁴⁾。

- ・ 自由で安全な時間と空間、信頼できる仲間との交流を保証する機能。
- ・ 大学生活や社会生活への復帰を促進する機能。
- ・ 未解決だった自立の課題を達成するための、移行対象的機能。

大仲（2004）は、学生相談センターや学生相談センターの「ロビー」が持つ、多様なコミュニティ機能に注目し言及している。学生相談センターの自然発生的に生成されたロビーの使用事例から、必要な機能を「4R」としてまとめている。以下にその「4R」について列挙する⁵⁾。

- ・ Rest: 休息, 静養。
- ・ Recreation: 休養, 元気の回復, 気晴らし, 娯楽, レクリエーション。
- ・ Relax: ゆるめる, 力を抜く, ゆるむ, 和らぐ, 骨を休める (Relaxation: ゆるみ, 弛緩, 休養, 骨休め, 気晴らし)。
- ・ Refresh: 気分をさわやかにする。活気 (元気づける), 元気を回復する, 気が清々する (Refreshment: 元気回復, 気分をさわやかに

すること。Refresher: 元気を回復させる人)。

以上のように、様々な形で居場所的機能およびその有用性が示唆されるようになってきている。しかしながらそれらの研究は事例を旨とする研究であり、量的な観点から検討を行った研究は見受けられない。

1.4 問題の概括

大学生を対象とした居場所感と精神的健康に関する検討は散見される程度であり、また、学生相談室の利用の有無と大学における居場所感が、大学生生活における精神的健康に及ぼす影響についての検討は見受けられない。

2. 目的

本研究は、大学生の大学における居場所感と学生相談室の利用の有無が大学生生活不安感にどのような影響を及ぼすかについて検討を試みる。またX大学における学生相談室が、居場所感を高める可能性を有した取り組みを行っていることを鑑み、学生相談室の利用の有無が居場所感に及ぼす影響についても検討を試みる。

3. 方法

3.1 調査対象

調査対象であるX大学は、製造学科と建設学科の二つの学科からなる大学で、1年生から4年生までの総学生数は1058名である（男子1005名、女子53名）。

今回の調査協力者は、X大学の学生530名（男子501名、女子29名）で、平均年齢20.16歳 ($SD=2.27$)であった。調査用紙の回収率は、1年生145名（男子140名、女子5名）、2年生179名（男子169名、女子10名）、3年生89名（男子86名、女子3名）、4年生117名（男子106名、女子11名）であった。

3.2 X大学における学生相談室

3.2.1 学生相談室の利用形態 (1)

X大学学生相談室の利用の仕方について、1対1の個別カウンセリングや、心理アセスメント、教

員や職員へのコンサルテーション、保護者へのガイダンス及びコンサルテーション等については、事前に電話かメールによって、面接を実施する日時を決定し、その日時に面接等を実施した。また学生などが直接来室し、面接等を希望した場合においては、来室した時間の状況に応じて対応した。

3.2.2 学生相談室の利用形態 (2)

「学生（保護者・教職員等）と面接を行っている」、「学生（保護者・教職員等）と面接の約束をしている（面接の予約）」、「相談室にかかわる業務全般を行っている」といった時間以外、学生相談室のドアに入室可能であることを知らせるボードをかけ、その時間内において、学生は自由に入室可能とした。

一度に入室できる学生の人数は、4～8名程度とした（カウンセラーの任意で人数を制限した）。

話す時間については、カウンセラーの任意によって、時間の延長・短縮を行った。

話す内容については、学生の自発性を優先した。入室しているメンバーによって、話す内容についてはカウンセラーが進行役を担った。学生各々で日常会話を行うことも許容した。

学生に伝えたルールとして、(1)「相手を傷つける内容の話をしていない」、(2)「緊急の面接の要請があった場合は、面接を優先するため、相談室をすぐに退室する」、(3)「カウンセラーの任意で居場所的な使用を急に中止することがある」、

(4)「同席しているメンバーの良いところを見つけ、批判することよりも称賛することを心がける」、

(5)「（カウンセリングを行っている学生を対象に）カウンセリングで話している内容をむやみに話さない」、(6)「この場で話したことをむやみに他言しない（インターネット等に掲示しない）」であった。

3.2.3 学生相談室の利用の目的（学生相談室の利用形態 (2) の場合）

複数人の学生による学生相談室の利用の仕方については前項で触れた。本項では、その利用の目的について以下に列挙してみたい。(1) 同学年の交流だけでなく、他学年との交流の促進、(2) 他学科の学生との交流の促進、(3) 身近な学生をモデリングし、ソーシャル・スキル、コミュニケー

ション・スキルの修正および学習、(4) ソーシャル・サポートの増加による不安やストレス反応の軽減、(5) 身近な学生からの称賛による自己肯定感の増加、(6) 他学生やカウンセラーとおしゃべりなどによるリラクゼーション、(7) 学生同士による情報交換の促進、(8) 大学への帰属感を高め大学不適應の回避、(9) 個別のカウンセリングの場から大学の日常生活の場への「つなぎ」などである。

3.2.4 本研究における X 大学 学生相談室の取り組みについて

X 大学の学生相談室は、上記したような学生相談室の利用形態や目的を総じて、大学における学生の居場所感を高める可能性を有する取り組みも数年に渡り実施してきた。本研究もまた、X 大学学生相談室における取り組みについて、居場所感を高める可能性を有する取り組みと位置づけた。

なお今回の調査では、利用形態（1対1のカウンセリングか、集団での利用か等）や利用頻度、また列挙した様々な取り組みについての個々の効果検証を行うものではなく、これらの取り組みを行っている学生相談室の利用の有無に着目し検討を試みた。

3.3 調査時期

2010年の11月中旬の2週間程度の期間を使用して、調査を行った。

3.4 調査手続き

X大学の許可を得て、全校調査という形式で調査を行った。主として講義時間中、集団形式で実施した。調査用紙の回収方式はX大学の現状に即し、(1)「講義後に講師が回収」、(2)「学科事務室に回収BOXを設置し、学生の任意で回答を投函」、(3)「研究室で配布および回収」、(4)「研究室で配布し学生の任意で回答を回収BOXに投函」といった方式がとられた。

3.5 使用測度

今回の調査に際し、以下のフェイスシートと2つの測度を調査に使用した。

3.5.1 フェイスシート

フェイスシートには、学生の氏名、性別、年齢、学科、学籍番号（学年）、相談室の利用の有無についての記述欄を設けた。

3.5.2 使用測度 (1)

「大学生における学校の居場所感尺度」

斎藤 (2007) によって作成された尺度を今回の調査に使用した⁶⁾。大学生が認識する学校 (大学) における居場所感を測定する尺度である。この尺度は2因子15項目の尺度で、第1因子である「肯定的心理状態」は、「自分がいきいきできる」や「自分が必要とされている感じがする」といった12項目で構成されている。第2因子である「価値観の共有」は、「自分のことをわかってくれる人がいる」といった3項目で構成されている。

斎藤 (2007) によれば、「大学生における学校の居場所感尺度」の第1因子「肯定的心理状態」の α 係数は.95、第2因子「価値観の共有」の α 係数は.84であり、高い信頼性を保証した尺度であることが確認されている。

また妥当性の検証に関しては、自己受容尺度の評価次元と感覚次元との相関係数を求め、それぞれ中程度の相関が確認されている (評価次元 $r=.50$, 感覚次元 $r=.46$, $p<.01$)。

回答は「とても強く感じる」から「まったく感じない」までの6件法により求めた。

3.5.3 使用測度 (2)

「大学生生活不安尺度」

藤井 (1998) によって作成された尺度を使用測度として今回の調査に使用した⁷⁾。この尺度は、大学生において特徴的に認められる不安感の程度を測定する尺度である。この尺度は3因子30項目の尺度で、第1因子である「日常生活不安」は、「大学で自分のことをどう思っているのか、気になります」や「大学の先生と話をするとき、とても緊張します」、「一か月の生活費が足りるかどうか、心配です」といった14項目で構成されている。第2因子である「評価不安」は、「成績のことが気になって仕方ありません」や「申請した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配です」、「卒業論文が書けるかどうか、不安です」といった11項目で構成されている。第3因子である「大学不適應」は、「こんな大学にいたら自分がだめになるのではないかと憂鬱な気分になることがあります」や「入学した学部が自分にあって

いないような気がして不安です」、 「大学を退学したいと思うことがあります」といった5項目で構成されている。

藤井 (1998) によれば、「大学生生活不安尺度」の第1因子「日常生活不安」の α 係数は.85、第2因子「評価不安」の α 係数は.78、第3因子「大学不適應」の α 係数は.81であり、高い信頼性を保証した尺度であることが確認されている (尺度全体では $\alpha=.84$)。

また妥当性の検証に関しては、CMI健康調査票によって分類された被験者の大学生不安尺度を様々な観点から分析を行った結果、高い臨床的妥当性を保証する結果が確認された。また大学生生活不安尺度の下位尺度と日本版 MAS, 青年版 TAI との相関係数を求め、基準関連妥当性が保証することが確認されている。

回答に際しては「はい」か「いいえ」のどちらかに○をつけるように求めた。

4. 結果

4.1 学生相談室の利用の有無と居場所感高群・中群・低群による大学生生活不安感の比較

まず、居場所感合計得点の平均値と標準偏差を算出したところ、平均値は 60.64、標準偏差 (SD) は 13.75 であった。全調査対象者 (有効回答) を平均値 $\pm 1/2SD$ を基準として、高群 (160名)、中群 (162名)、低群 (162名) に分類した。そして学生相談室の利用の「有る・無し」と居場所感合計得点 (高群・中群・低群) を独立変数、大学生生活不安感を従属変数とした2要因の分散分析を行った。なお、相談室利用有り・居場所感低群は14名、相談室利用有り・居場所感中群は15名、相談室利用有り・居場所感低群は13名、相談室利用無し・居場所感低群は148名、相談室利用無し・居場所感中群は147名、相談室利用無し・居場所感高群は147名であった。

分散分析の結果、学生相談室の利用の「有る・無し」と居場所感合計得点 (高群・中群・低群) について有意な交互作用は認められなかった ($F(2, 478) = 0.29, n.s.$)。次に、相談室利用の「有る・無し」と大学生生活不安感、居場所感合計得点

Table 1 result of the mean, *SD* and ANOVA for the total scores of college life anxiety

grouping of "sense of <i>Ibasyo</i> "	low group		middle group		high group		ANOVA <i>F</i> (2, 491)
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
total scores of college life anxiety	13.93	6.62	11.80	6.17	10.25	6.86	5.14 * *

* * $p < .01$

と大学生生活不安感について主効果を確認した。その結果、相談室利用の「有る・無し」の群間の大学生生活不安感に有意な差は認められなかった ($F(1, 478) = 2.07, n.s.$)。居場所感合計得点(高群・中群・低群)の群間の大学生生活不安感について、表 1 にあるように有意な差が認められた ($F(2, 478) = 5.14, p < .01$)。さらに多重比較(TukeyのHSD法)を行ったところ、居場所感低群 > 居場所感中群 > 居場所感高群という結果を示していた(1%水準)。

4.2 相談室の利用の有無による居場所感の比較

相談室の利用の有無による検討を行うために、「大学生における学校の居場所感尺度」の合計得点について t 検定を行った。表 2 は、相談室の利用の「ある」・「なし」の「大学生における学校の居場所感尺度」合計得点の平均値と SD を示したものである(等分散性について、Leveneの検定を行った結果、等分散性が仮定された)。その結果、「大学生における学校の居場所感尺度」合計得点について、相談室の利用の有無の差は見られなかった ($t(501) = 1.51, n.s.$)。

Table 2 the mean and *SD* for the total scores of "sense of *Ibasyo*" classified by using or no using counseling room

	using	no using
N	49	454
<i>M</i>	57.73	60.86
<i>SD</i>	15.42	13.58

4.3 相談室の利用の有無による「肯定的心理状態」の比較

相談室の利用の有無による検討を行うために、「大学生における学校の居場所感尺度」の下位尺度である「肯定的心理状態」について t 検定を行った。表 3 は、相談室の利用の「ある」・「なし」

の「肯定的心理状態」の平均値と SD を示したものである(等分散性について、Leveneの検定を行った結果、等分散性が仮定された)。

その結果、「肯定的心理状態」について、相談室の利用の有無による差は見られなかった ($t(505) = 1.61, n.s.$)。

Table 3 the mean and *SD* for the total scores of "positive mentality condition" classified by using or no using counseling room

	using	no using
N	49	458
<i>M</i>	47.35	48.08
<i>SD</i>	12.97	11.12

4.4 相談室の利用の有無による「価値観の共有」の比較

相談室の利用の有無による検討を行うために、「大学生における学校の居場所感尺度」の下位尺度である「価値観の共有」について t 検定を行った。表 4 は、相談室の利用の「ある」・「なし」の「価値観の共有」の平均値と SD を示したものである(等分散性について、Leveneの検定を行った結果、等分散性が仮定された)。その結果、「価値観の共有」について、相談室の利用の有無による差は見られなかった ($t(518) = 0.80, n.s.$)。

Table 4 the mean and *SD* for the total scores of "sharing of sense of values" classified by using or no using counseling room

	using	no using
N	50	470
<i>M</i>	12.4	12.78
<i>SD</i>	3.33	3.18

5. 考察

5.1 居場所感と大学生生活不安に関する考察

居場所感高群・中群・低群による大学生生活不安感の分散分析の結果、居場所感低群>居場所感中群>居場所感高群という結果が示された。以上の結果から、大学において居場所感を有していない学生は、大学に居場所感を有している学生よりも、大学生生活における不安を高く感じていると考えられる。

5.2 学生相談室利用の居場所感に関する考察

今回の調査の結果では、相談室を利用している学生と相談室を利用していない学生に居場所感の有意な差は見られなかった。今回の調査では単純に相談室利用の有無による分析を行ったが、相談室の利用頻度によって、居場所感に差が見られる可能性を今後は検討する必要があるだろう。

そもそも学生相談室は、カウンセリングや1対1の個人面接などの機能を主としているが、X大学の学生相談室は、先述したようにそれらの機能に加え、居場所感を高める可能性を有した様々な取り組みを行っている。カウンセリングを含めた1対1の個人面接は、必ずしも居場所感を高めることを前提とするものではないが、大学において居場所感が低いからこそ学生相談室に居場所的機能を求める可能性等を有していることを考慮すれば、相談室の利用形態や利用目的に着目しながら、今後、学生相談室の居場所感について検討を行う必要があると思われる。

5.3 総合考察

今回の調査において、大学において居場所感を

有していない学生は、大学に居場所感を有している学生よりも、大学生生活における不安を高く感じていることが示唆された。学校不適応に学生が抱える不安が影響を及ぼしているとの田中ら(2007)の指摘⁸⁾を考えれば、予防的観点から、居場所感が高まる環境の整備や、大学内において居場所的機能を高めるような取り組みが望まれる。

謝辞

本調査に際し、千里金蘭大学 斎藤富由起先生より多大なるご協力を賜りました。心よりお礼を申し上げます。

文 献

- 1) 石本雄真：居場所概念の普及およびその研究と課題、神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要, 3, 1 (2009) 93-100.
- 2) 杉本希映・庄司一子：大学生の「居場所環境」と精神的健康との関連—過去の「居場所環境」の認知と精神の比較を中心に—, 共生学教育研究, 1 (2006) 37-47.
- 3) 杉本希映：中学生の「居場所環境」と精神的健康との関連の検討, 湘北短期大学紀要, 31 (2010) 49-62.
- 4) 屋宮公子：学生相談室におけるサポート・グループ—大学に居場所のない学生によってつくられた「三間の器」—, 学生相談研究, 29 (2008) 25-36.
- 5) 大仲重美：学生相談機能におけるコミュニティについて—学生相談室に必要な「心の居場所」—, 学生相談センター紀要(武庫川女子大学), 14 (2004) 51-60.
- 6) 斎藤富由起：大学生および高校生における心理的居場所感尺度作成の試み, 千里金蘭大学紀要, 4 (2007) 73-84.
- 7) 藤井義久：大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討, 心理学研究, 68, 6 (1998) 441-448.
- 8) 田中存・管千索：大学生生活不安に関する心理学からのアプローチ, 和歌山大学教育学部紀要, 57 (2006) 15-22.